

フィリピンはあらゆる 平和活動の原点



出射優行
本会布教開発部長

学林一年生の秋。フィリピン・バタワン州を初めて訪れた私は、フレンドシップタワーの梵鐘の前に立ち、体に衝撃が走るのを抑えられませんでした。梵鐘に刻まれた開祖さまのお言葉。

『フレンドシップタワーの鐘の音は たたかいに倒れ給うた方々の冥福を祈り フレンドシップタワーの鐘の音は 友好と平和を願う われわれの心の輪をひろげ フレンドシップタワーの鐘の音は 地上に寂光土建設の妙なる調べとなりますように』

まさにこの地から、多くの青年たちが慰霊と友好と平和のために世界へ羽ばたいていくようにとの、開祖さまの願いを感じたのです。この言葉を自分の生き方にしよう——そう思いました。

同じ年の春、私は布教実習先の豊田教会で、マニエル・バンソンさん（バンソンパパさん）と出会いました。バンソ

ンパパさんは、ご兄弟を「死の行進」で亡くした経験を持ちながら、一番最初からホームステイ受け入れに尽力いただいた方です。当時の教会長さんから「石和温泉に連れて行ってあげなさい」と言われ、一瞬、「温泉？」と戸惑いましたが、二人で温泉に浸かりながら心の距離も近くなりました。別れ際、「今度はフィリピンにいらっしやい」と言っていたのですが、まさかわずか半年後に一食平和基金のプログラムの調査隊として再会できるなんて夢のようでした。当然、バンソン家に滞在し、家族の一員として受け入れていただきました。私が受けた温かいおもてなしは、きっとフィリピンを訪れただれもが体験していると思います。そして、そうした家族的な交流があつてこそ、四十年の歳月のなかで、ともに平和を目指す「協働」の関係が築けたのだと確信しています。

そうした協働に至るまでの歴史的歩みのフロントに立つ青年のみなさんに大切にしてほしいこと。それは、そうしたフィリピンの人々との明るく温かい交流は、七十一年前のフィリピンと日本の悲しい戦争で犠牲となった人々の慰霊の上に築かれていることを忘れてはならないということです。世界の人々と喜びや豊かさをわかちあうことを願っています。そして、慰霊と懺悔の実践や悲しみを共有してこそ、真の友情と協働が発展していくと信じます。「一食を捧げる運動」や平和活動はそうした思いが結晶して展開されていることを忘れないでいてください。



コレヒドール島での慰霊供養（写真左が本人）